

第14回 日能研

# 文学コンクール

## 優秀賞

【論説文】「聞き取り科」を作ろう

学習院女子高等科・二年

尾尻 こふみさん

作品に対する思い・感想

優秀賞をいただくことができ、大変嬉しく思っております。

今回のテーマである「新しい教科」についてはアイデアは浮かぶものの、具体化するのに苦労しました。漠然とした考えをいかにして具体的形にまとめていくか文章を書きながら学ぶことができたように思います。

「聞き取り科」を作ろう

尾尻 こふみ

私達高校生は毎日本当によくおしゃべりをする。しかし、そのほとんどは学校の友達とである。その他、先生方や親とも話をするが、いずれもよく知っている間柄なので、簡単な言葉で話を通じることも多い。よく考えてみると、そのような身近な人以外とじっくり話す機会は驚くほど少ないことに気づく。そこで、私は新しい教科として「聞き取り科」を提案してみたい。

「聞き取り科」のねらいは、できるだけ多くの人と直接話をする機会を持ち、相手の話をしっかり聞き取ることだ。普段、同年代の友達同士のコミュニケーションに偏っている中高生にとって、さまざまなタイプの相手と意思疎通を図ることは考えている以上に難しいと思うが、そこから多くのことを学べるだろう。

では、実際にどのように進めたらよいか考えてみる。まず、学校のホームページなどを通して「お話し相手ボランティア」を募集する。なるべく多様な人材が集められるよう、例えば老人ホーム、小学校、大学などの留学生センター、近隣の店舗や会社などにも協力を呼びかける。性別、年齢、職業などの社会的立場、国や地域の違う人など、いろいろな人材が集まるのが理想だ。こうして「お話し相手ボランティア」のリストができたら、好みの偏りをなくすため無作為に組み合わせを決める。場所はボランティアの方の負担軽減のために相手の居場所に出向く。ただし、トラブル防止の観点から自宅などは避け、必ず第三者がいる場所を選ぶ。フリートークではなく決められたテーマに沿って話を進める。例えば「好きなテレビ番組」や「今夢中になっていること」など、単純で相手をよく知ることができる話題がよいと思う。「聞き取り科」では聞き取ってきた内容をクラスで発表し、生徒同士シェアする時間も持つ。これによって、ただのおしゃべりではなく、相手が伝えたかった内容を自分なりに整理することができ、発表し合うことで更に多くの人のお話を間接的に聞くこともできる。「聞き取り科」ではすべての活動の中で個人情報取り扱いには最大限の注意を払わなければならない。

「聞き取り科」を担当する先生は、客観的な立場から「興味深かったこと」や「もっと知りたかったこと」などをアドバイスしてほしい。そして、この教科に関しては評価は行わない。経験そのものが大事なので、内容については優劣をつけないことにする。評価をすると、話を誇張したり面白くしようと作り話をしたりする可能性が出て、教科の意味が全くなってしまうからだ。

「聞き取り科」は教科にするほどではないと思われるかもしれないが、学校で学ぶ教科にすることによって、すべての生徒がさまざまなタイプの人と話をする機会が確実に作れる。SNSが発達し、短い言葉のやりとりだけで話を通じってしまう今の時代だからこそ、しっかりと相手の話に耳を傾けることは、意識して取り組む価値のある教科になると思う。将来、「聞き取り科」は役に立った、「聞き取り科」を学んでよかった、と多くの生徒が実感すると確信している。